

May, 1936.

159

Study of *Puccinia malvacearum* from the Sporidium to the Teliospore, Jour. Agr. Res. vol. 51. No. 9, p. p. 801 — 818, 1935.)

子囊菌及び擔子菌を通じて Spermatium が其作用を全ふするものは子囊菌の *Laboulveriomycetes* や地衣を構成する *Lecanorales* のものに見、子囊菌中 *Pezizales*, *Hysteriales*, *Sphaeriales* 等の Spermatium は實際有効なるや否明ならず、それで従来 Spermatia は地衣構成子囊菌にのみ歴史的有効なりし面影を止るに過ぎぬものと考へられしが、R. F. ALLEN, C. F. ANDRUS, M. A. RICE の諸氏は 1932年以來銹菌の Spermatium の有性作用に就き研究し、諸氏の結論は皆本菌は性的關係別体にして、一の生ずる雄器の口より排出さるゝ雄子群は糖粘液にして、芳香を散じ昆虫を誘引し、之によりて他体の雌器の trichogyn に接着し、又は他体の奇主上にもたらされ雄器の Paraphysis に接着して其中に入り以て他体の一部をして兩核たらしめ、又表皮上に雄子發芽して表皮又は雄器をとほして奇主体内に浸入し、以て雄性菌糸を成し他体の菌糸と關係し以て銹子を分生するを知り、更に又銹子も夏子も雄器も作らぬものも亦性的關係別体にして兩胞子に由來せる兩菌糸の Pseudogamy により冬子を形成す。

(G. KOIZUMI)

神田千代一氏：— 日本産昆布科の有性世代，（北大海藻研究所歐文報告，第一卷二號，1936）

氏は多年日本昆布科の有性世代に關する研究に没頭しつゝありしが今回、チガイソ、ネコアシコンブ、スヂメ、マコンブ、ワカメの五種に就き其有性世代の形態を發表せしは頗る注目すべし。

氏は昆布科の游走子は眼點を有するなきを斷言し、褐藻としては寧ろ稀なる事とし又雄性配偶子囊は單胞ならざるものはなく、又有性世代は必單性にして兩性のものなく。雄性世代の細胞は雌性世代より小さく、常に三細胞以上を以て其体を構成するに雌性世代は唯一細胞にて成り得、雄性世代は精虫をだせば直に退化するも雌性世代は二細胞以上を以て成れば永存し或ものは七ヶ月にも達す。精虫は多少楕円体にして游走子の小形なるものゝ如く、長さ四ミウあり、体の側方に生ずる二本の鞭毛を有す、藏卵器は長き長楕円体にして内より卵はしぼり出されて器の先端に附着しつゝ精子の來るを待ち、受胎後も卵子は其處にて發生をはじめ。 (G. KOIZUMI)